

大使を送るべし
遂に血を見

全權ばかりか書記や通譯

吉村昭

時四十八分

税關波止場

三時拔錨出帆

ポーツマスの旗

外相・小村寿太郎

新潮社

戦争に負て談判で大勝利を占めた敵の大使
は遠に小村よりはウツテだ

横濱の大使歡

還遯當時の前例に従ひ議和條件の發表

爆

東京府内の武部賣渡
國民の本
自から明かな

聲

日比谷に

吉村昭

ポーツマスの旗

外相・小村寿太郎

新潮社



ポーツマスの旗

定価九八〇円

昭和五十四年十二月二十日 発行
昭和五十五年三月二十日 四刷

著 者 吉 村 昭 あきむら

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 東京 二六六五二二
編集部 東京 二六六五四二
〒一六二 振替東京四八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担でお取替えします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・神田加藤製本

©Akira Yoshimura, Printed in Japan.1979

ポーツマスの旗

明治三十八年六月中旬、東京市は梅雨に入った。十一日から降りはじめた雨はほとんどやむことなく、道路はぬかるみ、わずかに陽が雲間からもれると町々に洗濯物が一斉にひるがえった。

十六日から五日間にわたって間断なく降りつづいた雨は土砂降りに近く、溝の汚水はあふれ、低地の家屋密集地帯では出水騒ぎもあった。中旬の降水量は例年の倍以上で、それは下旬にもひきつがれた。

二十六日夜、にわか風雨が強まって雷鳴がとどろき、稲光がひらめいた。雨が瓦や道路に飛沫をあげ、随所に落雷があった。

梅雨があげ、暑熱が訪れた。道を往き交う人々は扇子を手にし、手拭で汗をぬぐう。蠅が旺盛な繁殖力をしめし、夜になると家々に蚊遣りがたかれた。

六月三十日、日本橋を中心に店をかまえる人形商に、早朝から旗売り商人の出入りがみられた。かれらは国旗や旗竿を争うように買いもとめると大八車にのせ、さらにまとまった数量を注文して去る。また、附近の住民たちの中にも店にきて旗を購入する者が多かった。

その現象は、新聞の朝刊に掲載された短い記事によるものであった。前年の二月に日露戦争が勃発したが、日本軍は、開戦直後からロシア軍を終始圧倒し、その年に入ると難攻不落と称された大要塞

の旅順を激戦の末占領することに成功、遼陽、沙河の戦いにも勝利をおさめ、奉天の大会戦でもロシア軍を敗走させた。その頃から新聞紙上に、ヨーロッパ方面からの情報として、アメリカ大統領テオドール・ルーズベルトの幹旋による日露両国の講和の気運がきざしているという記事がみられるようになっていた。が、ロシアは、日本にうばわれた制海権を取りもどすため本国から新編成の第二、第三太平洋艦隊を出発させ、艦隊はアフリカ南端をまわる長い航海をへて日本近海に近づいていた。世界各国は、やがて開始される大海戦の予想に興奮し、自然に講和論は立ち消えになっていた。

五月二十七日、ロシア艦隊と日本艦隊が対馬海峡で接触、二日間にあつて激烈な戦鬪を海上一帯にくりひろげた。海戦の結果は史上類のない日本艦隊の一方面的勝利に終り、ロシア海上兵力は潰滅した。

この海戦により講和論が再び起り、それに関する欧米各国からの情報がひんばんに報道されるようになった。

六月十二日、新聞に日本政府がルーズベルト大統領の講和会議開催の提議を受け入れたことが発表された。アメリカ駐在公使高平小五郎を通じてルーズベルトの勧告をうけた首相桂太郎は、日本政府の決議としてそれに応じ、ロシア政府代表と講和条件を協議するため全権委員を派遣すると回答したという。

さらに会議開催地がアメリカの首都ワシントンに内定したことが報じられ、六月三十日の朝刊に、「我購和全権大使小村外相一行は、七月四日横浜出帆米船コブチック号にて出帆することに決定し、横浜四番館太平洋汽船会社支店は、同船室を用意したり」という官報が発表された。その記事は、旗幟小売商人を刺戟し、大量の仕入れ注文になってあらわれたのだ。小村全権が発する日には家々に国旗がかかげられ、全権一行が通過する沿道にも国旗を手にした市民がむらがることは確実で、かなりの需要が予想された。

国旗は、国民になじみ深いものになっていた。

幕末に薩摩藩主島津斉彬が西洋型帆船「昌平丸」を建造して幕府に献上する折、異国船と見まぢがえられぬよう日の丸の幟旗を日本国の船印にしたいと申出で、幕府はそれをいれて日本の総船印に定めた。維新後、明治政府は、明治三年日章旗の制式をきめ、国旗とすることを布達した。その後、国旗は公的機関に掲揚されるにとどまっていたが、明治二十七年、日清戦争の勃発と同時に国民の間に普及するようになった。成歎の役、黄海海戦、旅順戦、威海衛戦にそれぞれ勝利をおさめる度に、家々には国旗がかかげられ、軍旗である旭日旗も掲揚されるようになった。

明治三十七年二月、日露戦争が開始されると、国旗は各家々に不可欠のものになった。緒戦の仁川沖海戦、九連城戦の勝利が号外でつたえられると、強大国ロシアへの畏怖が大きかっただけに喜びを国旗に託し、人々は旗を手に行列を組み、夜にはほおずき提灯も手にして万歳を叫びながら町々を練り歩いた。その熱狂ぶりは勝利がつたえられるにつれてたかまり、五月十日の東京市でおこなわれた祝勝会では十万におよぶ市民が旗や提灯を手を繰り出し、大混乱が起きて二十名が圧死したりした。

その頃から、家々では国旗が連日かかげられるようになった。朝、人々は旗竿を軒に立て、日没時に取りこむ。日章旗と旭日旗を交差させてかかげる家もあり、白地に赤の旗が全国にあふれた。

旗作りの専門業者はなく、もっぱら人形商がそれにあたっていた。武者人形などに附属する幟旗を作ってきた技術を生かして、製造販売に従事していたのである。

日清戦争当時の旗は、膠をまぜたベンガラで日の丸を染めつけていたが、戸外にさらされると色が褪め、雨にあたるとにじむ。その後、ドイツから化学染料が導入され、日露戦争が開始された頃には、洋名スカーレットの朱の染料が使われていたが、依然として染料としての定着度は弱かった。雨が落ちてきた折、取り入れることを忘れた家の国旗は、朱の染料が幾つもの筋になって流れおち、中には白地に朱の色が薄くひろがっているものもあった。

そのため、旅順開城、奉天大会戦、日本海海戦の折に新しく国旗を買い替える家が多かったが、小村全權の出発の折にも同じ現象が起き、さらに前例のない旗の需要がみられるにちがいなかった。開戦後、一年四カ月間に古びた旗の朱の色はほとんど流れ落ちていて、勝利による戦争の終結を意味する全權の出発を、白地に鮮やかな朱の色を印した旗で歓送することが予想された。

国旗の注文は、翌日になるとさらに増し、日を追うにつれてその傾向はつのつた。人形作りの仕事は閑散期にあつたので、店々では旗作りに専念した。家族たちは寢食を惜しんで仕事にとりくみ、臨時に多くの人もやとわれた。

綿布を裁断して縁を縫う者、土間にすえた釜で染料を固定するコンニャク糊を煮、染料にまぜて攪拌する者、布に凹型の型紙をのせ、竹の皮のバレンで朱色の染料をこすりつける者などが、あわただしく家の中で動きまわっていた。

下請けからは、オガ屑を膠でかためた球がはこびこまれ、金色の塗料がぬられる。大八車で竹竿がとどけられ、幹に黒色塗料がだんだんに塗られた。その模様は、鉄道開通の祝いに国旗を測量棒にとりつけたことから一般化したものであった。

旗が天日に干され、染料が乾くと小売商人が争うように持ち去る。人形商の干場には、日章旗がつらなり夏の陽光を浴びていた。

欧米列国間での講和勧告のきざしは、すでに前年の明治三十七年十二月中旬にあらわれていた。

その頃、乃木希典大将のひきいる第三軍が、満州軍総司令部の命令で旅順要塞に対する総攻撃をくりかえしていた。旅順攻略が成功するか否かは、日露戦争の勝敗を左右するもので、陸戦のみならず海上兵力の存亡にも重大な関係があつた。

開戦直後の仁川沖海戦につぐ黄海海戦、蔚山沖海戦で日本海軍は制海権を獲得、旅順港内に「レト

ウイザン」をはじめロシアの戦艦五隻、巡洋艦二隻その他砲艦、駆逐艦十余隻をとじこめることに成功していた。が、制海権奪回をくだてたロシア皇帝は、戦艦七隻を主力とした第二太平洋艦隊を編成、本国を出発、東洋海域にむかつて回航させていた。

第二太平洋艦隊が日本近海に接近すれば、当然、日本艦隊の旅順港口の監視はゆるみ、港内のロシア艦艇が封鎖線をやぶって脱出し、来航してくる第二太平洋艦隊と合流することはあきらかだった。もしも、それが実現すれば、ロシア側は戦艦十二隻を擁した大艦隊となり、わずか戦艦四隻を主力とした日本艦隊を潰滅させ、日本と大陸との補給路を断つて日本陸軍を孤立させるにちがいがなかった。それは、すでに弾薬をはじめ軍需品の補給に苦しんでいた日本陸軍の全滅を意味していた。

日本陸海軍の唯一の期待は、旅順を攻略し、港内にひそむ旅順艦隊を潰滅させることで、その重大使命をになった第三軍の精鋭が八月十九日に総攻撃を開始したのである。

しかし、旅順要塞は予想を絶した堅固さで、守備隊の戦力は世界最強のロシア陸軍にふさわしい頑強な抵抗をしめし、総攻撃は四、八〇〇名の死傷者を出しただけで失敗した。その後、第二、第三回の総攻撃がくりかえされたが、結果は同じで、満州軍総司令官大山巖元帥は、総参謀長児玉源太郎大将を旅順に急派し、乃木の指揮権を児玉に移譲させた。児玉は、積極戦法に出て、旅順要塞の要衝である二〇三高地に攻撃を集中させ、多くの犠牲を出しながらも十二月五日、高地の占領に成功した。それによって、旅順要塞の攻略作戦は新たな展開をみせた。

そのような時期に、日露両国の講和をくだてた幹旋案が、突然のようにフランスから日本側にしめされたのである。

フランスは、植民地政策でイギリスと対立関係にあり、また隣国ドイツとも歴史的に敵視し合っていたので、それら両国の脅威からのがれるためにロシアの軍事力にたよって露仏同盟をむすんでいた。フランスにとって、日露戦争は、自国の存立に重大な影響があるとされていた。ロシアは日本との

戦争で、兵力をヨーロッパから極東に移動させていて、もしもフランスが他国におびやかされた場合、ロシアの軍事力に多くを期待することはできなかった。また、フランスはロシアに多額の戦費を貸しあてていて、もしも戦争が長期化し、しかもロシアの敗北によって終れば、それらの資金を回収する可能性はほとんどなくなる。このような事情から、フランスは、日露戦争の終結を強く願ひ、講和斡旋することによって国際間の自国の立場もたかめようとくだてたのである。

フランス政府は、実行方法について検討した末、ロシア駐在フランス大使ポシパールに、フランス駐在日本公使本野一郎との接触を命じた。ポシパールは、ロシアの首都ペテルスブルグからパリにもどつてきて、十二月十四日、本野公使を訪れ、講和に対する日本側の意向をただした。

本野は、意見を述べることを避けたが、ポシパールが、
「日本の立場もあるだろうが、一応本国政府の意向をただして欲しい。もしも、その意向があるならばペテルスブルグにもどり、ロシア政府と交渉してみる」

と、言つた。

本野は諒承して、その旨を本国につたえた。それに対して小村外相は、

「日本政府側から講和を口にすべき時ではない。ロシアはしばしば戦争継続を声明しており、もしも誠実な態度で講和を乞うてくるならば、その時にはじめて考えるべき問題である」

と、回答した。

本野がそれをポシパールにつたえると、ポシパールは落胆しながらも、講和会議の開始は旅順陥落前におこなうのが良策だろうと意見を述べた。が、本野は、旅順陥落前に講和会議をおこなえば、旅順はそのままロシアが租借地として保有することになり、そのような条件は論外だ、と一蹴した。

その間に、日本陸軍は二〇三高地を攻略した後、旅順要塞の堡壘をつぎつぎに占領し、明治三十八年一月一日、旅順市街に突入するまでになった。その日の午後三時三十分、ロシア軍の軍使が日本軍

陣地を訪れて降伏を申出、旅順は日本側の手に落ちた。その攻城戦で、旅順港内にあったロシア戦艦四隻のうち三隻を撃沈、一隻を大破し、旅順艦隊を全滅させた。

旅順陥落の報が世界各国につたえられると、講和論が公然となえられるようになった。旅順が難攻不落の要塞であっただけに、その陥落が欧米各国にあたえた衝撃は大きかった。

ヨーロッパ情勢は、日露戦争によって一層複雑化していた。ロシアが兵力を極東方面に投入し、しかも連敗をくりかえしていることが、辛うじて保たれていた各国間の均衡を乱していた。

最大の危機を感じていたのはフランスで、ロシアの軍事力の弱化にいらだち、孤立することを恐れてイギリスへの接近をはかった。イギリスは明治三十五年（一九〇二）一月に日本と同盟をむすんでいて、ロシアの同盟国であるフランスのイギリスに対する働きかけはロシアに対する背信でもあった。

イギリスが日本と同盟をむすんだのは、清国、韓国をはじめ極東地域に対するロシアの積極的な權益拡大を、日本を利用して阻止しようとしたためであった。また日本も、世界屈指の軍事大国であるイギリスと手をむすぶことによって、地勢上、日本の安全をおびやかす清国、韓国へのロシアの軍事的進出を牽制しようとする意図をいだいていた。日英同盟は、日本またはイギリスが一国と交戦状態におちいった時は中立を守り、二国以上と開戦した折には参戦するという協約をふくんでいた。そのためイギリスは、もしもフランスが同盟国ロシアに加担して日本に宣戦布告した場合、協約にしたがって軍事行動に出なければならなかった。フランスとは植民地問題でしばしば摩擦を起しており、参戦すればフランスとの植民地戦争に拡大する。もちろんそれは回避することが好ましく、イギリスは、日露戦争が勃発してから二カ月後の明治三十七年（一九〇四）四月八日、フランスとの間に英仏協商を締結した。

ドイツは、ロシアの日本に対する戦争を強力に支持していた。ロシアの極東地域における植民地政策に便乗して權益の分け前を得ようとしていたからで、同時にイギリスを牽制し他地域での植民地拡

大競争でも優位に立とうとくわだてていた。が、イギリスがフランスと協商を締結したため、ドイツはイギリス、フランス両国に脅威を感じ、一層ロシアとの結びつきを強めていた。

そうした情勢の中で旅順要塞の陥落がつたえられたのだが、その報はヨーロッパ諸国に反響をまき起した。新聞には、旅順はロシアの極東政策の象徴的存在であり、その陥落はロシアの敗北を決定づけたもので、これ以上戦争を継続させることは無意味であり、講和をむすぶ時機がきたという論調がしきりだった。が、その一方では、軍事大国ロシアの名誉のため講和を勧告するような軽率な動きをとるべきではない、という慎重論もみられた。

このような動きに対して、日露両国政府は、いずれも、戦争は第一段階を終えただけで、今後、勝利を期して戦いつづけるだろうと声明し、講和勧告に応ずる気配は全くなかった。

しかし、日露両国とも戦争継続には大きな不安を感じていた。

日本は、戦前、ロシアの露骨な極東政策に危機感をいだき、戦争回避のため外交交渉を通じて妥協点を見出すことに全力をかたむけた。それは、ロシアの軍事力とそれを支える工業力、経済力に脅威を感じていたからであった。が、ロシアは、日本の交渉を無視して清国との間に約束した満州からの撤退に応じず、逆に兵力を増強し、韓国への圧力もたかめていた。

そのため、日本政府は自国の存亡を賭けて開戦にふみ切ったが、政府首脳者をはじめ陸海軍の上層部の者たちは最終的な勝利を信ずる者はなく、短期決戦に唯一の期待をかけていた。満州軍総司令官の大命を受けた大山巖元帥は、戦場におもむく折り海相山本権兵衛に、

「戦さはなんとかやってみますが、刀を鞘におさめる時期を忘れないでいただきたい」

と、長期戦の勝利がおぼつかないことをもらしたが、それは大山のみの感慨ではなかった。

事実、ロシアの総兵力は日本のそれをはるかに上廻り、日本が本土に三個師団を残すのみであったのに対して、ロシアはヨーロッパからの大増強が可能で、欧米諸国は日本の敗戦を予想していた。が、

予測に反してまず日本海軍は、ロシアの東洋に配置されていた海上兵力を潰滅させ、日本陸軍も連戦連勝の末、旅順要塞を陥落させた。それは、欧米各国はもとより日本の為政者、軍人にも信じがたいことであつた。

しかし、相つぐ戦鬪で日本のこうむつた犠牲は甚大だつた。旅順攻撃では約四万の兵力を失ひ、特に将校の死傷者が多く作戦を進行させる上に重大な支障になつてゐた。また、弾薬不足は長期にわたつた旅順戦で深刻化してゐた。

開戦以来、陸軍省は、東京、大阪両工廠に徹夜作業を命じて弾薬の生産量を増加させ、さらに民間工場も動員してゐた。が、開戦後四カ月たった頃には、すでに戦場からの要求量に応じることが不可能になり、七月下旬にはドイツのクルップ会社その他の外国の会社に砲弾の弾体を発注しなければならなかつた。

そのような中で、旅順要塞への攻撃がはじまつたが、第一回総攻撃が失敗に終つた頃、早くも攻撃を担当する第三軍は砲弾不足におちいつた。第三軍参謀長伊知地幸介少将は、砲一門に対して二百発ずつの砲弾を急送して欲しいと陸軍省に要求したが、陸軍省は、

「最早此以上重砲弾ヲ送ルベキモノナシ。偏ニ節用ヲ乞フ」と、返電した。

陸軍省は、内地の弾薬をかき集めて戦場に送ろうとしたが、それを許せぬ事情があつた。すでに、ロシア本国から第二太平洋艦隊が発射し、東洋に向いつつあつて、当然、陸軍省は、海軍の迎撃作戦に呼応して日本各地の海岸に据えられた砲台を強化し、応戦準備をととのえる必要にせまられてゐた。が、各砲台の砲弾は最小限の量しかなく、それを大陸の戦場に送ることは不可能であつた。

旅順要塞への第二回総攻撃は、十月二十六日朝からおこなわれた。攻撃開始にあたつて第三軍参謀長伊知地少将は、砲一門に対して三百発の砲弾の發送を満州軍総司令部に要請したが、兎玉総参謀長

は、

「貴軍ニ野戦砲彈ノ充分ナラザルコトハ固ヨリ承知ス。然レドモ当方面（満州戦線）ニ於ケル此砲彈ノ不充分トソノ需要ノ急ナルコトハ到底貴軍方面ノ比ニ非ズ。……故ニ貴軍ニ野戦砲彈ヲ補給スルハ目下ノ場合絶対ニ為シ能ハザル所ナリ」

と回答した。

満州軍総司令部では、旅順総攻撃の相つぐ失敗にいらだちながらも、ロシア満州軍総司令官クロバトキン大将指揮のロシア軍主力と激烈な戦闘をくりかえしていた。

旅順総攻撃がおこなわれた頃、日本軍主力は、北進して日露両軍の決戦場と予測されていた遼陽にせまっていた。が、日本軍の弾薬をはじめ軍需品の不足は深刻で、さらに兵員殊に将校の補充も困難であった。海上輸送は、船舶不足とウラジオストクを基地としたロシア艦隊におびやかされ、さらに揚陸した軍需品の陸路輸送も難航していた。

遼陽に軍を進めることは補給路をそれだけ伸ばすことであり、大山総司令官は、日本軍の現状からみて遼陽戦が日露戦争の限界であるとひそかに考えていた。

八月下旬、大山は、補給に不安をいだきながらも、遼陽への攻撃開始を命じた。ロシア軍二十二万五千、日本軍十三万五千で、日露戦争開始後、初めての大军の激突であった。

クロバトキン大将は自ら指揮にあたり、総攻撃を命じた。戦闘は世界戦史上前例をみない熾烈さで、八日間にもおよんだが、クロバトキンは決戦を避けて全軍を退却させ、日本軍は九月四日、遼陽城内に突入、占領した。

劣勢の日本軍は勇戦奮闘したが、それだけに損害も大きく、ロシア軍の死傷一万六千に対し、戦死五千五百、戦傷一万八千計二万三千余にもなった。

この戦闘前、大山は砲弾発射量を節約するよう厳命したが、戦闘が終った時には銃砲弾特に砲弾は

ほとんど射ちつくされていた。そのため、ロシア軍を追撃することはできず、陸軍参謀本部次長長岡外史少将は、弾薬が補充されるまで二、三カ月間は休戦もやむを得ない、と進言したほどだった。

日本軍は遼陽の戦いに勝ったが、戦力はさらに弱まっていた。

満州軍総司令部では、各地に諜報員を放っていたが、それらのもたらす情報は、ロシア軍の兵力増強をつたえるものばかりであった。ロシア軍は、九月中旬までにヨーロッパからの増援軍の到着によって日本軍の三十八個師団に相当する兵力にふくれあがり、日本軍は後備兵力を加えても二十個師団を維持するにすぎなかった。士気の点についても、日本軍將兵の中には遼陽戦が日露戦争の最後の戦いであるという気配がみられ、ようやく弛緩の風潮も濃くなっていた。兵の間に、「補充兵は消耗兵、進軍ラッパは冥土の鐘」などという言葉も交されるようになっていた。

ロシア軍は、日本軍の追撃を予想していたが、密偵を放った結果、余力を失っていることを知り、クロバトキンは、十月初旬、反攻に転ずることを命じた。

日本軍は、攻守両様の作戰方針を立ててこれを迎え撃ち、各地で激戦が展開された。児玉総参謀長は最前線で指揮をとり、十月十日から逆襲に出たが、ロシア軍の抵抗は激しく、沙河河畔の万宝山では第四軍の山田支隊と第三師団の一部が三方から包囲されて日露戦争はじまって以来の敗北をこうむり、甚大な損害をうけて敗走した。

しかし、大勢は日本軍側が優勢で、猛攻の末、ロシア軍を撃退することに成功した。

満州軍総司令部の高級幕僚の大半は、この好機に乗じてロシア軍を追撃すべしと主張し、数回にわたって意見書を児玉総参謀長を通じて大山総司令官に提出した。が、弾薬の枯渇と兵員不足によって追撃は大敗北につながると判断した児玉は、意見書を大山に渡すことなくごとく握りつぶした。

日本軍の進撃はやみ、ロシア側も攻勢をしかけることなく、戦線は膠着状態に入った。その間、児玉は総司令部をはなれ、乃木から指揮権を得て旅順要塞攻撃の積極作戦を成功にみちびいたのである。

旅順要塞の陥落は、欧米諸国に衝撃をあたえたが、ドイツ皇帝ウイヘルム二世は、ひそかに講和方法について画策していた。友好関係にあるロシアの利益を前提にフランス、アメリカを誘って独仏米三国の圧力で日本に講和を強要し、日本とイギリスの結びつきに楔を入れ、イギリスを孤立させようとしたのだ。この動きに気づいたイギリスは狼狽し、ルーズベルト大統領と親交のある外務省職員をアメリカに急派した。イギリスも、ドイツ、フランスと同じように日露戦争によって東洋での自国の権益を失うことをおそれ、逆に日露戦争を利用してその拡大を願っていたのである。

日本政府は、それら諸国の意図を察知し、干渉されることを極度に警戒していた。そして、植民地政策に最も淡泊と思われるアメリカに接近し、ひそかに戦争終結への道を見出そうと願っていた。

しかし、日本としては、遼陽、沙河戦につぐ旅順戦に勝利をおさめたものの、現状で講和をむすんでは戦勝国としての有利な条件を得ることが期待できぬ、と判断していた。それは、ロシア政府がしばしば強硬な戦争継続の声明を発し、敗戦国としての意識を少しもみせないことによるものであった。ロシア政府は、本国を出発したロジェストヴェンスキー中将指揮の第二太平洋艦隊の強大な戦力が日本艦隊に潰滅的な打撃をあたえるにちがいない、と声明し、また遼陽、沙河の戦いに敗れはしたが数十万に増強されたロシア陸軍が、戦力の低下した日本陸軍を潰滅させるはずだ、と公言していた。

アメリカ大統領ルーズベルトは、旅順陥落後、フランス大統領エミール・ルーベを通じて、「現在、和議をおこなえばロシアの損失条件は軽くてすむだろう」

と、ロシア皇帝ニコライ二世に勧告した。しかし、ニコライ二世は、「本国を発したロシア艦隊と奉天附近に集結する数十万の陸上兵力の勝利を確信し、あくまで戦争を継続する」

と、きびしい態度で拒否した。